

主 題：互いに赦し合うこと

聖書箇所：マタイの福音書 18章21-35節

今日のテキストはマタイ18：21-35です。この箇所を読みます。

「：21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」：22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」：23 このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。：24 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。：25 しかし、彼は返済することができなかつたので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。：26 それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。：27 しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。：28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。：29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。：30 しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。：31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。：32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。：33 私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』：34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。：35 あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」

今朝、ごいっしょに学んでいきたいことは「互いに赦し合う」ということです。先週、私たちは「互いに愛し合うこと」について見ました。なぜ、私たちは互いに愛し合う必要があるのか？そのことを三つの理由を通して学びました。

☆なぜ、互いに愛し合うのか？

1. 神を知っている者の当然の応答だから

救われた者は互いに愛し合う者へと変えられたのです。私たちのうちに神の愛が根差しているからです。神の愛が私たちのうちに住んでいるから、私たちは互いに愛し合うべきだと言います。

2. イエス・キリストを通して、神が私たちに示してくださった神の愛の形だから

私たちが神の愛を考えると、神は相手がだれであろうと状況がどうであろうと、率先して相手の最も必要としているものを犠牲を払って与えてくださったということを知ります。神はそんなすばらしい愛で私たちが愛してくださったのだから、私たちも同じ愛でお互いに愛し合おうではないかと言います。

3. この世における私たちの証となるから

この世にあってはだれ一人として神を見た者はありません。私たちが互いに愛し合うならそれを通して人々は神を見ることができると言います。

ですから、私たちが互いに愛し合うこと、それは私たちの選択ではなく、私たちに与えられた命令です。私たちが互いに愛し合うことは私たちひとり一人が負っていく責任なのです。そして、私たちがこの責任を実践するとき、最も大切なカギになるもの、もっと言えば、互いに愛し合うことの根底となるものは、今日見ようとしている「互いに赦し合う」ということです。互いに赦し合う、それは私たちが互いに愛し合うことを最も実践しているから可能なのです。互いに赦し合うことほど神の愛を証するものはないのです。

私たちは知っています。私たちが住むこの世界が罪に溢れていることを、そして、私たち自身も罪人であることを聖書から知っています。罪人であるゆえに、私たちは罪を犯します。どこにあって私たちが知らないうちに人を傷つけたり、悲しませたり、自分は何も問題ないと思うようなことばで人を怒らせたり、ちょっとした行き違いで誤解や落胆を起したり、だれかの正しくない行動で妬みや憎しみを抱いたり、裏切りによって失望や敵意、復讐心を抱くことがあるのです。そして、明白なことは、私たちがこのような思いを心に持っているなら、そこには喜びがいつさいありません。これは教会においても同じことです。夫婦間で、親子の間に、教会のリーダーと会衆の皆さんの間にあって、教会員同志の中であって、性別や年齢に関係なく起こることです。

もし、私たちが先に挙げたような、悲しみや怒り、誤解や落胆、妬みや憎しみ、失望や敵意、それらを私たちが心のうちに持ち続けているなら、残念ながら、そこには一致はありません。この世にあって私たちが「互いに赦し合うこと」が大切だと知っています。しかし、私たちがクリスチャンとして、

神の家族として生きていくに当たって「赦し合うこと」は必要不可欠なことです。そのことを知っていると同時に、私たちは「互いに赦し合うこと」には非常な困難を伴うこともよく知っているのです。

たとえば、皆さんもこのような経験があるでしょう。この人は「ごめんなさい。赦してください。悔い改めます。」とあなたの許に来て、同じことを何度も繰り返すなら、私たちは「この人はまた同じことを繰り返すのではないかと次にやったらもう赦さない。」と思います。また、この人は私のことをこんなにも傷つけたのにそのことを何とも思っていないと。自分は今苦しく惨めに生きているのに、私を傷つけたあの人は何の苦もなく生きている…、こんな人は絶対に赦すことはできないと。赦せないと思うだけでなく、その人に何か復讐しようとさえ思います。また、この人にはもういくら言っても意味がない。この人は私のことを全然理解してくれない。だから、起こったことはもう自分の中で蓋をして閉じ込めておこう、もう失望してしまっただけだと言います。

私たちは口では「大丈夫、あなたのことを赦します。」と言いながら、心の中では相手のことを思う度に敵意や怒り、憎しみや悲しみ、失望を覚えてしまうこと、そのようなことはないでしょうか？今、この学びを始めるに当たって、一つの質問を自分自身に問い掛けてください。今、心の中に「この人はどうしても赦せない」という思いがある人はいないでしょうか？もし、そのような人がおられるなら、どうか、今日のみことばに耳を傾けてください。互いに赦し合うということは、教会が一致し、その一致を保つために必要不可欠なものです。私たちが兄弟姉妹と愛し合い神に喜ばれる関係として成長していくに当たって、赦し合うことは絶対に欠かすことが出来ないのです。私たちは「赦し合う」ことを実践していかなければいけないのです。

☆テーマ = 互いに赦し合うことにおいて成長する

では、「赦し合うこと」は具体的にどういうことでしょうか？そのことを今日はごいっしょに見ていきます。テキストを見る前に確認しておきたいことがあります。聖書が教える「赦す」ことの定義です。私たちは「赦す」ことに関して間違っただけの考えを持ってしまっているからです。

◎定義 : 「赦す」

・定義 : 「負っている負債を帳消しにする」という意味を持っています。相手の負っている負債を帳消しにしそれを思い出すことをしないということです。エレミヤ書 31 : 34にはこのようにあります。「そのようにして、人々はもはや、『【主】を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らが見な、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——【主】の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」、この「思い出さない」とは「起きた出来事を忘れてしまう」ということを言っているのではないのです。なぜなら、皆さんご存じの通り、神は全知のお方です。ですから、神が何かを忘れることは有り得ません。では、ここにある「思い出さない」とはどういうことでしょうか？これは「神が意図的に赦したことを思い起こすことをしない」ということです。

ですから、このことを私たちに当てはめるなら、何か相手から受けたいやな思い、相手に対して抱いた怒りや敵意などの感情を私たちのうちに持ち続けたいということなのです。カウンセリングの本を多く著した Jay・Adams (ジェイ・アダムス) はこのことを分かり易くまとめてくれています。

・「赦す」ということは相手に対して三つの約束をすることです

- (1) 私はあなたに、この出来事を再び蒸し返すことはありません。
- (2) 私は他の人に、この出来事について話すことはありません。
- (3) 私自身、この出来事について自分の中で固執し続けることはありません。

ですから、まとめるとこのように言えます。聖書が教える「赦す」とは、単に、私たちが「ごめんなさい。赦してください。」と、相手が「はい、OKです。」というようなことではありません。私たちが間違っただけをした相手に対して、自分の意志をもって自分の負の感情をすべて帳消しにし、この先思い出さないということです。完全に赦した人、心から赦した人はその問題に対しても、その相手に対しても蒸し返すこともない、他の人に告げ口することもない、自分自身の中でそれに対して様々な負の感情を抱くことがない、心の中でそのような思いを持ち続けることがないのです。これが聖書が教える「赦し」です。

ですから、もし、私たちが「あなたのことを赦します。」と言った後に、相手に対して怒りや妬み、失望などが私たちの心の中にずっとあるのなら、それは聖書が教える「赦す」ということではないのです。私たちが「互いに赦し合いなさい」という命令を与えられたとき、私たちに与えられている責任は私たちが考える「赦し」を実践するのではなく、神から教えられた「赦し」、神の定義によって示された「互いに赦し合うこと」が必要なのです。そのことをパウロはエペソ書でこう記しました。エペソ 4 : 32 「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」、私たちが神の定義に基づいて、神が私たちに赦してくださったように互いに赦し合う必要があるということです。そのことを私たちは覚えておかなければいけないのです。

さて、実際に、「赦し合うこと」はどういうことなのか？そのことをごいっしょにテキストから見ていきましょう。もう一度、21節から見てください。

◎命令： 何度でも互いに赦し合うこと 21-22節

「:21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」:22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」、私たちもよく知っている通り、マタイの福音書18章では、罪を犯した兄弟姉妹に対して残りの者はどのようにその問題に向き合うべきなのかということイエスが教えている様子を見ることができます。もし、兄弟が罪を犯したことに気付いたなら、もし、兄弟姉妹が正しい道から外れていることにあなたが気付いたなら、まず、あなたは一人で彼のところに行ってその問題について話し合うようにと、そして、彼が悔い改めなければ、そのことを全く問題としていないのなら、次は二人か三人で行って…、それがだめな場合は教会に伝えるようにと、そのようにイエスは教えました。

私たちが知っていることは、このことは決して、罪を犯した兄弟姉妹を教会から排除することを目的にするものではないということです。ここで言われていることは、間違っている兄弟の罪を指摘し、それを悔い改めさせ、赦し合って和解することで本当の兄弟を得るためだということです。このことを直前に教えられたペテロは、自分の弱さ、人間の本質をよく分かっていました。ですから、21節の質問をしたのです。「私は何度まで兄弟を赦せばいいのですか？いや、赦すことに限度はあるのですか？」と。ペテロはここで特に「七度まででしょうか。」と具体的な数字を使って聞いています。

この当時、ユダヤ人は習慣として、人が罪を犯した場合3度までなら赦されるという考え方がありました。その習慣は神がイスラエル民族に対してさばきを宣告されたところから来ているのです。アモス章1:3に「【主】はこう仰せられる。「ダマスコの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らが鉄の打穀機でギルアデを踏みじったからだ。」と書かれており、このことは1:6、9、11、13にもガザ、ツロ、エドム、アモン人に対しても言われています。神がイスラエルの隣国へのさばきを警告している様子を見ることができます。神は3度までは赦すが4度目からはさばきを与えるということです。ですから、この当時の人たちは私たちも同じように、3度までは赦すけれど4度目からは赦すことをしないとしていたのです。

ですから、そのことを覚えた上でペテロが「七度まで」と聞いたとき、彼の周りにはいる弟子たちも恐らくこう思ったでしょう。「普通の回数を倍にして、さらに、1回増やすなんて、そんな寛大なことはないだろう」と。ペテロは人がそのように思うほどの寛容さをここで示したのです。さて、このペテロのことばに対してイエスはこのように答えました。22節「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」と。私たちはここでペテロと周りの弟子たちが非常に驚いた様子を想像します。「普通の倍にプラス1回の7度でなく、その70倍ですか？490回も…」と。

でも、ここでイエスが言われたことは「あなたがたは490回は赦してあげなさい。491回目からはもう赦さなくていい」とそんなことではありません。「あなたがたは罪を犯した兄弟を何度でも赦すように」と教えたのです。「何度までですか？」「何度でも…」と言われたのです。それを聞いた弟子たちはただ驚いただけでなく、そんなことは自分には不可能だと思ったその様子がルカの福音書17章に記されています。17:3-5「:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」、ここで弟子たちが聞いて思ったことは「私たちには何度も何度も赦すことなどできない、不可能だ」です。だから、彼らは「私たちの信仰を増してください。」とイエスに願ったのです。私たちもよく同じことを思います。私たちは「私は弱いから、私の信仰は小さく弱いから何度も罪を犯す兄弟姉妹を何度も赦すことなどできません。」と言います。

もし、このように思っている人がこの中におられるなら、イエスが弟子たちに言った続きのことばをよく聞いてください。ルカ17:6-10「:6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言えば、言いつけどおりになるのです。:7 とところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい』としもべに言うのでしょうか。:8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。:9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するのでしょうか。:10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまつたら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

ここでのポイントはこういうことです。弟子たちは自分たちの信仰が小さいからできないとイエスに言いましたが、イエスは「からし種ほどの信仰があったなら、」と、どんなに小さくてもあなたのうちに

信仰があるのなら「あなたにはできる」と言われたのです。ここでの私たちの問題は同じことです。私たちは神から「やりなさい」と言われていることに対して、「私はできない、私の信仰は弱いから」と言うなら、それは信仰が弱いのではなく、私たちの中に主のみことばに従いたくないという思いがあるからです。それが問題なのです。

私たちは自分の力をするのではないのです。神の力、神の助けをいただいてするときには私たちにできないことはないのです。それでもなお「できない」というのは、あなたがわたしの命令に従いたくないからだと言われます。私たちがここで覚えなければいけないことは、「互いに赦し合う」ということは神からの命令だということです。そして、私たちが互いに愛し赦し合うとき、そこには制限がないのです。兄弟姉妹の皆さん、私たちが互いに赦し合うとき、そこに制限を設けてはいけません。

では、なぜ、私たちは何度も何度も赦し合わなければいけないのでしょうか？なぜ、7回、490回ではだめなのでしょう。もっと言えば、どうすれば私たちは何度も何度も互いに赦し合うことができるのでしょうか？そのことをイエスはたとえを用いて私たちに分かり易く教えてくれています。

◎私たちが何度も互いに赦し合うその理由 23-35節

それは「神が私たちが何度も赦してくださっているから」です。23-25節には「:23 このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。:24 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。:25 しかし、彼は返済することができなかったので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。」、

・「天の御国は…」 : これまでのたとえ話と同じようにイエスはペテロの質問に対して「天の御国」にたとえて答えていきます。このたとえはマタイの福音書の他の箇所でも見ることが出来ます。マタイ13:24、31、33-34、44、45、20:1などです。

・1タラント : あるとき、王はしもべたちに貸していたお金に関してその清算をしようとしています。そのうちの一人のしもべが1万タラントの借金をしていました。1万タラントがいくらになるのか？いくつもの考えがありますが、聖書の欄外注にもある通り、1タラントは6000デナリに相当するものでした。そして、1デナリは当時の一日分の労賃に相当するとあります。ですから、単純に計算すると、1万タラントは6000万デナリで、日数に変換すると約164年働いて返すのに必要だった額です。

また、ある人は、これは現在の価値にすると何百億、また、千億以上に相当する金額に値すると考えます。ここで大切なことはどれ程の金額だったかということではなく、ポイントは、このしもべは到底返すことができない負債を王に対して負っていたこと、そして、自力でその借金を返すことは不可能だということです。このしもべに対して王は「自分も妻子も持ち物全部も売って返済」しなさいと言います。この時代には借金を返済するために人を奴隷として売ることはごく一般的なことでした。たとえ、何を売り払ったとしてもこの人の借金が完済されることは不可能だったのです。

ですから、しもべはこのように叫びます。26節「それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。」、ここにある「ひれ伏す」ということばは「完全に降伏して自分の身を差し出す」ということを表わします。自分はもう何もできない、だから、完全なる降伏をもって身を差し出すのだということです。要するに、このしもべは気付いたのです。今、私が負っているこの借金はどんなことをしても決して返済することができないと。そして、それだけでなく、この借金は100%自分が悪いゆえだから、そのために王が罰を与えるのならそれを逃れることはできない、王の前に何一つ言い訳することはできない。どうあがいても、どれだけ時間の猶予をもらおうともこれを返すことは不可能だと。

そんな希望もなく絶望の中にいたしもべに対して王が取った態度は驚くべきものでした。27節「しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。」、返済期間を延ばすことでも返済の額を減らすことでもありませんでした。王はこのしもべをかわいそうに思って彼を赦したのです。しもべが負っていた借金をすべて帳消しにされたのです。ここで私たちが覚えなければいけないこと、そして、私たちが本当に感謝しなければならないこと、それは私たちの神もこの王と同じように私たちがあわれみ、私たちの罪を完全に赦してくださったということです。私たちは生まれながらに神に対して絶対に返すことができない負債を負っていたからです。

ローマ3:23に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、」とある通りです。私たちは罪人であるゆえに自分の思うままに生きていたのです。イザヤ53:6には私たちのことがこのように描写されています。「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。…」と。私たちは自分には力がある、自分の力でできる、自分には価値があると思ってしまう者ですが、聖書は私たちのことを「羊のように弱く、羊のように愚かだ」と言い表しています。そのような存在であるに関わらず、私たちは自分の好きなように自分の欲望を満たすために生きていた、神

を愛そうともせず、神に背を向けて逆らい続けていたと言います。他のだれでもない、この私が神の前に

負債を積み重ねその負債を自分で支払えないその罰を受けるべきだったのです。そんなどうしようもない弱く愚かな羊のために、罪深く何の希望もなかった羊のために、羊飼いや自らがいのちを捨てられたと言うのです。

先に見たイザヤ53：6はこう続いています。「しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」、私は自分の欲望のままに負債を積み上げてその返済の責任を負っている。でも、その支払いは自分では不可能だから私自身がその罰を受けて当然なのに、イエス・キリストが十字架に架かってこの私のすべての負債を赦してくださったということです。Iテモテ2：6に「キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。」とある通りです。イエスが「完了した」、「すべて終わった」と言われたときに、彼は私たちが持っていた絶対に返すことができない罪の負債を代わりに負って死んでくださったのです。このことが神が私たちに与えてくださった「神の赦し」です。神の敵として歩み、神が忌み嫌うことをしている私たちに対して、神はそのすべての罪を赦し帳消しにしてくださったのです。それだけでなく、もうそのことを「思い起こさない」と言われます。「わたしが赦したその罪をもう責めることはしない」と言われるのです。そのことを神は私たちに約束してくださったのです。

確かに、私たちには「互いに赦し合うこと」は非常な困難を伴うでしょう。相手がどのようなものであってもそれらをすべて帳消しにし、二度と思い起こすことをしない、こんなことは私たちには普通できません。でも、私たちの神がそんな愛でそんな赦しで私たちを赦してくださった。神がまずそうしてくださったのです。私たちはこの同じ「赦し」を実践する責任があると、そして、私たちに示されたその模範に従っていくことが私たちにはできると言われるのです。

さて、イエスの話はこれで終わっていません。続きがあります。28－30節「:28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。:29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。:30 しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。」、王に赦してもらったしもべがその後に行った行動はいったいどういうものだったでしょう？自分に借金をしている者を「つかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と」と迫ったのです。この「首を絞めて」ということばは「人を殺すために首を絞める」という強いことばです。しもべ仲間で彼から借りていた借金は「百デナリ」です。先に見た通り、1デナリは一日分の労賃です。ですから、100日分、約3ヶ月働けば返せる額でした。初めのしもべが借りていた金額と比べるとこの100デナリは有り得ないほど小さいものでした。しもべ仲間は「ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と頼みますが、最初のしもべと同じことをこのしもべも願ったのです。しかし、赦されたしもべが取った行動は王とはかけ離れたものでした。「彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。」のです。

このしもべ仲間は借金を返すことができました。しかし、牢に入れられました。大きな愛、大きなあわれみを受けた初めのしもべは、しもべ仲間にあわれみを示すことがなかったのです。その続きはこのように記されています。31－34節「:31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。:32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。:33 私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』:34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。」、王は自分が赦したしもべのあわれみの無さを知って怒りました。そして、彼に対して罰を与えました。

このたとえのまとめが35節にこのように記されています。「あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるのです。」と。ここでイエスが言わんとしたこと、それは、もし、私たちがキリストのすばらしい偉大な罪の赦しを知らながら、それに比べて遥かに小さい兄弟の罪を赦さないのなら天の父も同じように「あなたの罪を赦さない、あなたにあわれみを示さない」ということです。同じことが聖書に書かれています。マタイ6：14－15「:14 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。:15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」、また、ヤコブ2：13には「あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。」と書かれています。皆さんに勘違いしてほしくないこと、それは、もちろん、これは赦し合うことをすれば私たちは救われるとか、私たちが兄弟を赦すことをしないなら私たちは救われないとか、そういうことを言っているのではないということです。

でも、このたとえを用いてイエスが言わんとしたことは明白です。罪を赦された者、救いを得た者、イエス・キリストによって生まれ変わった者、その者は当然、その救いにふさわしい行い、ふさわしい

実を結ぶということです。具体的に言うなら、「互いに赦し合う」ことを実践するということです。確かに、私たちは救われた後も失敗を犯します。私たちは完璧に兄弟と赦し合うことができないことも多くあります。でも、もし、あなたが兄弟姉妹にされたことを根に持ち続け、心の中にその人のことを思うときに怒りや妬みや失望や復讐心や悲しみなどを持ち続けているなら、あなたがその兄弟姉妹を赦そうとしないのなら、そんなあなたを神も赦すことはないのです。そのような人に神は怒っておられると言います。救われた者はうちに住む聖霊によって、イエス・キリストにより似た者になっていき、変わり続けていきたくとそうように実践し続けています。私たちが模範とするイエス・キリストこそ「赦しの象徴」だったのです。私たちはこの生き方はイエスを証するものかどうか？そのことを私たちは自分に問い掛けなければなりません。イエスが赦したように、私たちは互いに赦し合っているのか？と。

そのことが私たちひとり一人に問われているのです。

◎実践 : 互いに赦し合うためにはどうすれば良いか？

さて、これまで「赦し合うこと」について見て来ました。しかし、私たちが一様に感じることは、互いに赦し合うことほど難しいことはないということです。先に見たように、私たちにはできない、私たちには難しすぎると、そこで止まっていたはいけないのです。では、どうすれば赦し合うことにおいて成長することができるのかと、このメッセージの最後にその秘訣をいくつか考えて終わらしましょう。二つの秘訣を挙げる事が出来ます。

1. 私たちがイエス・キリストの赦しを覚え続けること

私たちはいつも神の赦しのそのすばらしさに心を満たしておくことが必要なのです。皆さん、少し自分自身に問い掛けてみてください。あなたはどんなときに人を赦すことが困難だと思うでしょう？もし、私たちが「あの人が先に私に罪を犯した…、だから、私は赦せない」、相手が間違っていて自分は正しい、相手がしたことは私が赦せる許容範囲を越えていると思っているなら、また、もし、私たちがこんな酷いことをした相手に犠牲を払って赦す必要はないと、そのように心の中で考えているなら、私たちは「人と赦し合うこと」は絶対にできません。自分に問い掛けてください。あなたの生活でいったい何が中心ですか？私たちの生活では「私が中心」になっていないのでしょうか？

また、赦すことが困難なとき、自分に問い掛けてみてください。何が自分を「赦すこと」から遠ざけているのだろうか？と。プライドかもしれません。自分の中にある義かもしれません。そして、そのことを考えながら、イエス・キリストの赦しと自分の赦しとを比べてみてください。ルカ 23 : 34 「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」…」、イエスは十字架に架かっておられました。イエスの周りにはイエスのことを罵倒するような人がたくさんいました。イエスのもとに赦しを求めに来ない、赦しを必要としていない人たちがたくさんいたのです。まして、自分のことを殺そうとしている者たちがたくさんいたのです。その人たちに対してイエスが取ったことは「彼らに赦しを与える」ことでした。

被造物である私たちは創造主である神に対して逆らい愚かで自分勝手に恐ろしいほど罪深い歩みをしていたにも関わらず、神は赦しを与えてくださった。もし、神の赦し私たちの思いや心や態度、私たちの行為によって与えられるものであったなら、この中のだれ一人として神の赦しに値する者もその赦しを得た者もないのです。でも、神はそんな私たちを愛して、十字架の上でイエスは犠牲を伴ったその愛を示してくださったのです。私たちが覚えなければいけないことは、神の赦しはその対象がそれに値するから赦すというものではないということです。相手がどうであれ、私たちの責任は犠牲を払ってその人を赦すことです。イエス・キリストは私たちの罪を赦すためにご自分のいのちを犠牲にしてくださいましたからです。私たちは犠牲を厭わない赦し合いをしているのでしょうか？どんな犠牲でもささげることができるのでしょうか？

私たちが赦し合うときに覚えることは、そんなすばらしいイエス・キリストの赦しが今この私を生かしているということです。

2. 赦し合うことのすばらしさを覚え続けること

皆さんもこのような経験をされたことがあるでしょう。私たちが罪を犯してその罪が示されるときに、心の中にすごい罪悪感や責められる思いを持つことを…。ダビデも大きな罪を犯した後、その罪を告白する前の自分の苦悩をこのように記しています。詩篇 32 : 3-4 「:3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。:4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。セラ」と。私たちのうちに罪があるなら私たちの心は重く苦しみます。でも、その罪が赦されたとき、私たちは心から喜ぶことができると…。ダビデは罪が赦されたことをこの箇所の前でこのように記しています。詩篇 32 : 1-2 「:1 幸いなことよ。そのそむきを赦さ

れ、罪をおおわれた人は。:2 幸いなことよ。【主】が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は。」、

ダビデが罪を赦されて喜んだように、また、放蕩息子が自分の罪が赦されたことを喜んだように、私達も同じ神によって赦されたその喜び、平安を味わっているのです。私達たちが相手に対して苦い思いや憤りや怒りや失望を覚えるとき、私達の心の中は罪悪感や暗い思いに覆われ、喜びや平安がないことを経験します。「私の心は重い…どのようにして解決すればいいのか…」と。聖書が教えることは、「相手を赦しなさい。互いに赦し合いなさい。」です。もちろん、赦すことと完全に和解することは違います。あなたが赦した後、本当にその人との関係を修復するためには時間を要するかもしれません。しかし、相手がどうであっても私はその人を赦します、相手がしたことを帳消しにして思い起こすことをしないとすれば、神に赦していただいたその喜びと同じものを、私達たちが互いに赦し合うことによって持つことができるのです。皆さんも経験されたことがあるはずで、赦されたときに「ああよかった。心から重いものが取れた…」と。

兄弟姉妹の皆さん、私達たちは「互いに赦し合うこと」が求められています。何度でも、キリストの愛とその赦しを覚えて私達たちは互いに赦し合うことが必要なのです。私自身もこのメッセージを考え用意するに当たってチャレンジを受けました。互いに赦し合うことは難しい…、教会生活において何かをすることよりも、お互いに赦し合うこと、お互いに罪を指摘し合いそれを赦し合うことで一致することこそ、私達たちがこの世に出来る最もすばらしい証です。確かに、難しい…、でも、私達を神が犠牲的にすべてを帳消しにして愛してくださった、その赦し合いを私達たちは今日していくことが必要です。

ですから、どうか、このみことばを覚えて互いに赦し合ってください。そのことを是非、実践していきましょう。